

# 福澤諭吉における「立国の公道」

中国は「遅れてやってきた帝国主義国」である。持続的な高成長により掌中にした資金力をもって軍事力の強大化を図り、新覇権国家として世界に君臨したいという欲望を抑え切れないのであろう。

さもありません。米国は9・11同時多発テロ事件以来、世界の警察官であるよりも前に米本土防衛を主眼とする戦略へと舵を取り、ヒボットと称される東アジア基軸戦略も東シナ海・南シナ海への中国の膨張を押し止める力を発揮できないでいる。日本は平成不況にはまり込んで以降の長期低迷から脱する見込みが立たず、加えてこの間、少子高齢化の顕著な進行により経済社会の全体が衰亡の様相を呈している。

憲法を生命より上位に置く倒錯  
東アジアの現状変更勢力が中国であることに疑いはない。これに抗して東アジアの勢力均衡を辛くも保持する力量をもつメカニズムが日米同盟である。国際秩序を守るメカニズムが勢力均衡だという論理の基本には、古典も現代もない。違ひは、現代の勢力均衡のあり

りようが古典の時代に比べて格段に複雑化し、その分だけ高度の戦略的思考と情勢分析能力が必要だということだけである。

集団的自衛権は個別的自衛権とセットになってすべての主権国家に賦与されている固有の権利である。中国の尋常ならざる軍拡を前にしながら、憲法の制約のゆえになおこの固有の権利まで認められないというのであれば、帰結は憲法を国民の生命と財産より上位におくという倒錯である。

個別的自衛権をもって外敵に対処可能だと主張する者がいる。本気でそんなことを考えているのだろうか。国益の核心への侵犯がよいよ差し迫り、それでもなお座して死を待つ国家などどこに存在しえようか。個別的自衛権の法的な価値を大きく超えて他国の領域に侵入せざるをえなくなる羽目に陥る危険性は、国家が生存本能をもつ存在である以上、十分にあり

## 正論



拓殖大学総長 渡辺 利夫

得る。その程度の想像力を人々はなせもてないのか。

ナショナリズムの強化を

米国の覇権の大樹の陰に身を隠し秘やかに安穏な人生を送ることができた時代はもはや過去のものである。戦争は非道である。ならばその非道の抑止にはいかなる戦略が最適かに関心を向けないのであれば、人生の平仄が合わないではないか。官軍に矢を引いて西南戦争を引き起こした西郷隆盛を批判する往時のジャーナリズムを「政

る一方、支那、朝鮮がこの「西力東漸」の国際政治学を理解できず「旧套」の中に「窒塞」する

という現状を前にして、福澤は「公」(コスモポリタニズム)ではなく「私」(ナショナリズム)の強化こそが「立国の公道」であることを激情をもって訴えた。

文明は普遍である。この原理において欧米は日本より先んじているとはいえ、普遍には遠い。この段階にあっては、国家という存在と忠君愛国なる「私情」が不可欠である。確執限りなき内外条件からすれば「自国の衰頹に際し、敵に対して固より勝算なき場合にても、千辛万苦、力のあらん限りを尽し、いよいよ勝敗の極に至りて、始めて和を講ずるか、若しくは死を決するは、立国の公道にして、国民が国に報ずるの義務と称す可きものなり」と語り、これを瘦我慢の説だと銘じた。

独立不羈の国民育成  
人間という存在は、他の生命体と同じくその根本においては私であり、個の私情こそが至上の価値をもつ。しかし外国に対する場合

には必ずや同胞としての私情が湧出し、国民としての私情すなわちナショナリズムという「偏頗心」が優位を占めなければならぬと福澤は説く。私情といふ偏頗心というからには普遍としての文明からは隔たる心理ではあるが、各国民が私情と偏頗心を露わにしている以上、自らもこれを重んじなければ国はもたないと主張する。

福澤は好戦主義者ではない。学問を究めて高尚なる人間として「一身独立」し、もって「一国独立」すべきことを説き、「独立の気力なき者は、国を思ふこと深切ならず」と論じて、独立不羈の国民育成の緊急性を生涯にわたって主張しつづけた人物であった。

現代の極東アジア地政学は幕末・維新期を再現させるかのごとくに剣呑な状況に入らんとしている。他国が自国の領域を平然と侵害する現状を拱手傍観し、集団的自衛権のあれほど限定的な行使を認めるに異を唱えるというのであれば、福澤はその「文明の虚脱」に泉下で深い慨嘆の息を吐いているのに違ひない。

(わたなべ としお)